

大学での学びの回想

教育・昭和59年卒 藤原 浩二

私は今年、還暦を迎えます。37年間の教職から離れるという人生にとっての大きな節目を迎えました。中学校数学教員としてスタートし、数学教育を通して幸いにも教育行政や小学校経営等に携わることができ、思い返せば充実した教員人生であったと思っています。子どもたちや保護者、地域の人たちとの出会い、そして何よりも共に教育に携わってきた同僚との支え合いが、37年間のかけがえのない宝であると、しみじみと感じている日々です。

さて、大学での4年間を振り返って、数学に対する認識が大きく変わる事となった、42年前の大学1年生で受けた数学の授業を今でも思い出します。高校までは算数や数学の問題を解くことが好きで、他の教科に比べて多くの時間を費やした分、自分なりにはある程度の自信がありました。ところが、その授業では常に驚きと戸惑いばかりでした。まずは「 $1 + 1 = 2$ はなぜか？説明しなさい。」という教授の発問があり、その問いの意図や意味が分からず失礼ながら「なんて愚問！」と行ってしまいました。数学という学問が、原理や公理等の基本となる約束の下に成り立っているという認識をその時初めて学びました。そうした授業を受けていくにつれ、高校まで自分が取り組んできた「数学の勉強」が数学の本質を習得というよりも「解法の習得」であったように感じられるようになり、非常に大きな学びでした。

また、その後の数学の指導において大きな影響を及ぼす出来事が、大学2年の定期試験で起きました。あまりよく理解できていないという自覚はあったのですが、返却された試験の解答用紙を見て愕然としました。まさかの0点。真剣勝負で受けた試験で、ましてや算数、数学の試験で0点を取ったのはこれが人生初でした。このことは「数学が分からない児童・生徒の気持ち」を理解するのに大いに役立ったと思っています。できない、分からない児童・生徒の「分からなさ」、つまり「つまずき」の理解や数学嫌いにつながっていく分からないことの連鎖（系統性の強い教科の特性）への配慮が、多少なりともできるようになったと言えます。

40数年前、大学でのこうした学びは、教職人生に大いに生きて働いたことはいくらまでもありませんが、しっかりと数学教員を養成いただいたことに感謝をし

たいと思っています。そして、改めて言うまでもないのですが、仲間との語りやゼミ、アルバイト、旅行等、様々な社会経験がその後の人生の糧となり、今年、還暦を迎えることができました。大学4年間は、まさに社会人としての人生の基礎養成期間であったように思います。